

セリ

ますらをと 思へるものを 太刀佩きて
かにはの田居に 芹そ摘みける 薛妙観命婦

これは、時の左大臣である橘諸兄が、セリとともに贈ってきた歌に対する薛妙観命婦の返歌である。「立派なお役人なのに、太刀をつけたまま、“かには”の田圃で蟹のようにはいつくばりながら、セリを摘んで来てくれたのですね」と応答している。“かには”とは、“蟹幡”という地名と推定されている。

セリは春の七草の一つである。蔬菜として用いられるのが一般的で、薬草としての認識は薄い。ただ『神農本草経』(水芹)に「主女子赤沃、止血、養精、保血脈、益氣、令人肥健、嗜食」とあるように、同じセリ科の当帰や川芎と似た薬効を認めている。日本では民間療法としてセリの生汁がしもやけや小児の解熱に用いられた。また『大同類聚方』には、悪寒発熱して膝が腫れて化膿する者に、葛根、升麻、悪実と組んでセリが使われた処方もある。同じセリ科の独活、羌活、白芷、防風のような解表の働きもあるのかも知れない。セリ科には他に柴胡もある。

ところで、古伝『秀真伝』では、『記紀』にはない酢芹草が登場する。セリの仲間であろう。瓊々杵尊の正后、木花咲耶姫が産んだ三つ子の男児は、先ず火之明尊・梅仁、次に火進尊・桜木、末の子は彦火々出見尊・卯津杵である。この時、桜木が胎毒で水泡を伴う皮膚病を患った。そこで、酢芹草を使うとその胎毒を追いやるのが出来たのである。それに因んで、桜木のことを酢芹宮とも称するようになった。『秀真伝』ではこう述べている。「桜木蟹の瘡なせば酢芹草にて蟹掃きて瘡枯れ愈ゆる名も酢芹」と。「蟹」とは胎毒のことで、新生児の水瘡を指す場合もある。蟹糞といえは胎便のことであり、胎尿とも表現する。平安前期の『古語拾遺』に、彦火々出見尊の正后の豊玉姫が海辺の産屋で鶴茸草茸不合尊を産んだとき、箒で蟹を掃いた人がいるが、これが掃守(蟹守)の祖先だという記載がある。掃守はその後、宮殿の掃除や儀式の設営などに与かる職種となった。この史実は『記紀』にも『秀真伝』にもないが、恐らく酢芹宮の蟹を掃いた故事が訛伝されたのであろう。

そうすると、冒頭の和歌に見る“かには”とは“蟹掃”とも捉えられ、薛妙観命婦はその故事を知っていたためにセリと結び付けたのかも知れない。“太刀佩き”と“蟹掃き”も懸詞になっている。もしや、天皇直近の女官だった命婦がお子を産んだので、橘諸兄は胎毒を除くために、親切にもセリを贈ったと解釈するのは穿ち過ぎであろうか？

ところで、山幸彦、海幸彦とは、この彦火々出見尊と酢芹宮のことを指している。『秀真伝』によれば、瓊々杵尊は、彦火々出見尊には大津(滋賀県大津)に、酢芹宮には以前猿田彦命の仮宮のあった鵜川(滋賀県高島市鵜川)に宮殿を賜った。ここから、山幸彦海幸彦の物語が始まる。海幸彦である酢芹宮は随分意地悪な兄として登場するが、後に皇儲となる彦火々出見尊に恭順を示すのである。そして彦火々出見尊のお子が誕生したときには、胎毒を除くために新たに取り入れた海人草を勧めている。その功績によって酢芹宮は白髭神と称えられた。今、鵜川に湖中の鳥居で有名な白髭神社がある。

さて、『日本書紀』の山幸彦海幸彦の段では、正文の他に「一書曰」という伝承が八つも記載されている。どれが歴史の真実かは分からない。たとえ歴史の現場に居合わせたとしても、受け止め方によって伝承は異なる可能性はある。所詮歴史とは今の己の心を映し出す鏡なのであろう。筆者にとっては『秀真伝』が鏡となっている。柴胡や当帰や防風へと分化したセリ科植物の、原初の働きとは何だったのか、それを映し出す鏡に出会いたいものである。

(山人)

